

人工言語学研究会著 2011年8月19日初版

# 人工言語学

人工言語学の定義と範疇

## ●人工言語学の定義

人工言語は言語学の範疇ではない。これには通時的な理由と共時的な理由がある。

前者は1866年にパリ言語学会が人工言語に関する論文を受け取らないと決めたというものである。

後者は人工言語が制作者の恣意によって好きな形に作ることができるため、自然言語の研究と同じような分析を行うことができないというものである。例えば、類型論において最も一般的な基本語順はSOVであるが、人工言語は恣意的に作れるため、いくらでもこの研究結果を覆すことができる。類型論のみならず対照言語学などほかのあらゆる言語学の部門において、自然言語の研究を通じて言語学が明らかにしてきた成果を覆すことができる。これでは研究にならないということで、人工言語は忌避される傾向にある。

人工言語学とは、そんな渦中にある中であえて人工言語を言語学の範疇として研究する言語学の一分野である。主旨は「人工言語で言語学をすること」である。

人工言語学は2011年に人工言語学研究会によって提唱された学問である。ただし実際には研究会が発足される前に、2000年代から実質同じ概念が提唱されていた。研究会の代表が大学・大学院時代に人工言語で言語学を研究していたためである。

## ●人工言語学の範疇

### ・言語学的考察に耐える品質の人工言語

言語学の対象として人工言語を扱う以上、研究対象となる人工言語は言語学の成果を著しく覆すようなものであってはならない。あくまで言語学から見て不自然でない人工言語を取り扱う必要がある。人工言語が持つ「何とでも作れる」という恣意性を極力排他した、言語学の知識を十分に活用して作られた人工言語のみが研究対象となり得る。

従って、自然言語からの参照の度合いが高いアポステリオリ言語や、言語学に十分即した上で作られたアプリオリ言語が範疇となる。

また、これらの条件を満たす言語であっても、その言語が発展途上であるとか作られたばかりであるとか情報量があまりに少ないといった状況にある場合は、研究対象として耐えられない。

人工言語学では「人工言語で言語学をする」という主旨を満たすため、言語学的考察、特に対照言語学的分析に耐えうる品質の人工言語を対象とする。

言語学的考察に耐えうる人工言語とは、具体的には以下の条件を満たすものである。

- 1:当該人工言語が言語学的に見てあまりに不自然な造りをしていないこと。詳しくは言語学に矛盾しない人工言語の作り方を参照
- 2:当該人工言語の日本語資料が論文執筆に十分な程度存在し、かつ日本国内で容易に利用できること。具体的には1万語を超える単語帳形式でない辞書に加え、文法や音韻論等に関する詳細な教材が、書籍かオンラインで利用できること
- 3:少なくとも10年以上使用された実績があり、対照に用いるだけの信頼性を有すること

本研究会発足時点で上記の条件を満たしていた人工言語はアルカとエスペラントしか存在しなかったため、人工言語学ではこれらを自然言語と対照可能な人工言語と見なす。

#### ・ノコギリの押し引きに見る言語学の非独立性

言語学者の中には人工言語を研究範疇としないだけでなく、他の分野の学問と提携して言語現象を解き明かそうとさえしない者がいる。これは問題である。というのも、実際のところ言語現象は必ずしも言語学だけでは説明することができないためである。言語現象を説明するには言語学だけでは不十分で、言語学以外の分野を使わないと説明できないことが多々あるということである。

つまり言語学は言語現象を解明することに関しては独立した学問ではないのである。にもかかわらず言語学者の中には言語学だけで言語現象を解明しようとする者がいる。これは現実に即していない。

事実は事実と認めた上で対処しなければならない。人工言語学は言語学の非独立性を認めた上で、諸学問と連携しつつ言語現象を解明していくというスタンスを取る。

言語学の非独立性は例えばノコギリの押し引きなどに見ることができる。

日本語には「ノコギリを引く」というコロケーションがある。しかし「ノコギリを押し」というコロケーションはない。これはなぜだろうか。この言語現象は実は言語学だけでは解明できない。

ご存知の方も多いただろうが、日本ではノコギリは引くときに力を入れるようになっている。一方、欧米では押すときに力を入れるようになっている。いわゆる引きノコと押しノコの違いである。

引きノコは比較的柔らかい杉などの材質を切るのに用いる。このため、日本やトルコなどで採用されている。

なぜ日本語には「ノコギリを押し」というコロケーションがないのかということ、それは日本では引きノコを使うからである。そして引きノコを使うのは、杉などを切る機会が多いためである。

杉が多いという植生は日本の風土によるものであり、杉をよく使うというのは日本の文化によるものである。つまり、文化や風土という視点を入れないとこのコロケーションについては解明できないのである。

このように、言語現象は必ずしも言語学だけで解明できるとは限らない。風土や文化など、言語学以外の見方を踏まえて考察せねば解明できないことがある。

以上から、言語現象を説明するには言語学以外の視点も取り入れる必要があるということが分かった。言語学は言語現象の解明に関して独立した存在ではないのである。

また、当然それは人工言語学にもいえることである。人工言語学は言語学の一分野だが、考察を行う際は言語学だけでなく諸学問と合わせて研究していくことになる。